



冷徹宰相の無知妻教育  
体験版

がら堂 / どん丸

# A t t e n t i o n

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of  
this book, text and images are strictly prohibited.

## 登場人物

・エリアス

冷徹宰相。三十三歳。銀髪碧眼。歳を感じさせない美男子。  
わけあって突然ユリアと結婚する。

誰に対しても冷徹であり、ユリアにもそれは変わらない……？  
巨根。絶倫。自制心強め(?)

・ユリア

貧乏伯爵家の娘。十八歳。

ほとんど貴族令嬢としての教育は受けていない。

処女。巨乳。

## 一、初めての妻の勤め

「ユリア。来なさい」

「は、はい……」

本日をもって夫となったエリアスに呼ばれ、部屋の端っこで所在なさげに立っていたユリアは恐る恐る小さな体を前に進め、エリアスが腰掛けているベッドに近づいた。

「今日やることはわかつているな？」

「はい……」

まさか貧乏伯爵家の自分が国王の右上である宰相様の妻になるとは思っていなかったため、ユリアは冷たく見える瞳で見つめてくる

エリアスに顔を向けられず俯いた。

（宰相様も、私なんかと結婚することになって、嫌なんだろうな：  
…）

貧乏でも仲の良い両親を見て育ったユリアは幸せな結婚に夢を見ていた。もちろん、エリアスとそうなりたいと願っている。しかし引込み思案なところがあるユリアは、エリアスが自分を娶ることになってしまった原因を考えるとなおさら、自分からエリアスとの距離を縮めようとするのは難しかった。

「わかってているならいい」

「きゃ！」

宰相様の隣に座ってもいいのかもわからず立っていたユリアは腕を引かれ、なんと、エリアスの膝の上に乗せられた。

その上、熱い胸板にぎゅっと抱きしめられたのだ。

「え？ あ、あの……」

「大人しくしている」

エリアスは戸惑うユリアの顎を掴み上向かせると、緊張により普段より色の薄くなっている唇を奪った。

驚いて目をぎゅっと閉じたユリアは、より一層エリアスの唇を感じてしまう。冷たいと思っていた唇は熱くて、頭がふわふわしてくる。息ができなくてユリアが口を開くと、にゆるりと熱い舌が入り込んできた。

「んうっ!？」

どうしていいかわからず固まっていたユリアだったが、やがて体がぞくぞくと内側から燃えてくる感覚がやってくる。まるで唇から

エリアスの体温を分けられているようだった。

「ん……やあ……♡ あむ……ん……♡」

長い舌で上顎をくすぐられ、舌を吸われるたび力が抜けていく。恐れ多くてエスコートされる時くらいしか自分からエリアスに触れられなかったユリアは、必死でエリアスの胸元を掴んでいた。

「……ユリア、キスは初めてだったんだな？」

「はー、はー、は、はい……」

「これは妻の勤めだ。これからは君から進んでするようにしなさい」

「え……？ で、でも……」

「言い訳は聞かない。自分からするのだ。いいな？」

「は、はい……」

厳しい瞳で見下ろされ、ユリアはびくびくしながらも頷いてしま

う。こんなキス、自分からできるとは思えないが、妻の勤めならばしなければならぬ。

「……仕方ない。練習をするか」

「え……？」

「ほら、早くしろ」

「……はい」

促されたユリアは意を決して、真っ赤な顔になりながらちゅつとエリアスの唇にキスをした。エリアスは目を開いたままなので恥ずかしくて仕方がない。

「……まさか、それだけで妻の勤めを果たしているつもりか？」

「あう、あの……」

「言い訳は聞かないと言ったはずだ。舌を伸ばしなさい」

「はい……」

また怒られると思ったユリアは慌てて言われた通りにした。すると、エリアスはユリアの小さな舌をじっと見た後、エリアスもまた舌を伸ばした。

「俺のを舐めてみる」

「……は、はい……」

まだエリアスの公的な姿しか知らなかったユリアは、エリアスがプライベートでは『俺』を使うことに驚いた。

そしておそろおそろ小さく出した舌先で、ユリアは頬を真っ赤にしながらエリアスの舌をチロチロと舐める。

「ん……♡ ん……♡ ちゅ……♡ くちゅ……♡ あむ……♡  
ふあ、こ、こうですか……?」

小さな舌をしまったユリアは、恥ずかしそうにちらちらエリアスを上目遣いで見つめる。エリアスはまたユリアをじっと見つめ、「違う」と言った。

「それでは子猫と同じだ。君は俺の妻だろう。手本をするから、しっかり覚えなさい」

「は、はい……んむ♡」

「れるう、ぢゅ♡ ぐちゅ、ぢゅっ♡」

再び大きな舌で口内を蹂躪されるユリアは腰が砕け、すっかりエリアスに寄りかかってしまう。エリアスはユリアの腰を支え、さらに激しくユリアの口内を攻め立てた。何の経験もないユリアが食べられてしまうのかもしれないと怯えるほどの激しいディープキスだった。

「ふあ、んう♡ ん♡ ん♡」

「はあ……君に妻の勤めはまだ早いか？」

「あ……」

エリアスの冷たい声に、ユリアはびくりと震える。

「そ、そんな……私、がんばります！ だから……だから、見捨てないでください……！」

「………」

目に涙を溜めてユリアが縋ると、エリアスはまたユリアをじっと見下ろす。

「……わかった。ではもう一度、やってみなさい」

「はい……！」

ほっとしたユリアは、自分から顔を近づけ、舌を伸ばしてエリア

スの薄く開かれた口内にそれを入れた。

「んう……♡　ちゅぷ……♡　ん……♡　れえ……♡　れちゅ……

♡　くちゅ……♡」

一生懸命にユリアは小さな舌を動かさし、教えてもらったことを実践していく。エリアスの手のひらが褒めるようにユリアの腰を撫でたので、ユリアはぴくりと反応しながらほっとして、一生懸命舌を動かした。

「ぷあ……はあ、はあ……」

「……初日にしては、うまくできている。今後励むように」

「は、はい！」

褒められたユリアは嬉しくてにっこりと頬を緩める。エリアスはこれに厳しい目をした。

「……初夜はまだ始まったばかりだ。これで満足していたら後が思いやられるぞ」

「あ……ご、ごめんなさい……」

「続きをする」

「あ！」

着ていたガウンを肩から下ろされ、初夜用のベビードールがあらわになってしまう。すけすけの薄ピンクのそれはユリアの小柄ながらむちむちのエロい身体をより一層いやらしく見せている。

「……」

「ひゃ……！」

「なかなか重いな」

「え……」

大きな手のひらでたぶん♡ と乳房を下から救うように揉まれる。エリアスの言葉にユリアはシヨックを受けた。

「子を育てるには良い重さだ。母乳もよく出るだろう」

「あう……♡」

たゆん♡ たゆん♡ となかなかの巨乳をわざとつぽく揺らされ、ユリアの顔がまた赤く染まる。

「……ここか」

「ひゃ！♡」

すけすけのため隠せていない先端を指の腹で優しく擦ったエリアスは、顔を背けたユリアに低い声を漏らす。

「顔を隠すな。情事に顔を隠すのは不貞を疑われる行為だ」

「わ、私、不貞なんてしません……！」

「わかっている。だが、感じている顔は相手に見せ続けないと疑いが生まれる。声も同じだ。全て俺に見せ、聞かせろ」

「私……はずかしくて……」

「俺たちは夫婦なのだから、隠し事はいけない。わかるな？」

「はい……で、でも、あの……」

「……わかった。しばらくは目を瞑ろう。だが、俺が言ったら顔を見せなさい」

「わ、わかりました……」

はずかしそうに縮こまるユリアを見下ろし、エリアスはまたユリアの乳首を指の腹で擦った。

「んっ♡」

「ここをいじったことは？」

「あ、ありません……んっ♡ あう、からだ、へんですっ……んんっ♡」

元々貧乏男爵家の生まれで平民と変わりなく育った上、色々あった末の急な結婚だったため、ユリアは閨教育を受けていなかった。しかし何もわからないのに快楽を拾ってしまうえっちな身体をしており、それが何なのかわかっていないので、ユリアはより一層の恐怖を感じていた。

「……キスをした時も、似た感覚ではなかったか？」

「あ、そ、そうかも……んっ♡」

「その感覚を覚えるのも妻の勤めだ。俺が教えるから、その感覚に身を任せなさい」

「はい……んっ♡ んっ♡」



「いい子だ」

ちゅっと口付けられたユリアはどきまぎして頬を真っ赤にさせた。  
（また、いい子にしてれば……エリアス様に、いい子ってキスして褒めてもらえるかな……）

そんなことを考えているとまた胸を揉まれて「集中しろ」と言われる。また褒められるために、ユリアは言われた通りエリアスの大きくて熱い手のひらに集中した。

「はあ……♡ん……♡ふう……♡」

「ユリア……」

冷たい瞳とは裏腹にエリアスの声が熱っぽく聞こえ、ユリアのお腹がまたきゅんとする。いつのまにかベビードールははだけ、直接乳首をくりくり♡とこねられていた。

「あ♡ ん♡ はあ、はあ、宰相様っ……ん！♡」

「名前を呼びなさい。妻がそんな呼び方をしたらいけない」

「え、エリアス、さま……？ きゃう！♡」

きゅむ♡ と優しく乳首を潰され、ユリアの腰が跳ねる。

「そうだ。これからはそう呼ぶように」

「は、い……っん♡」

くにくに♡ と乳輪をなぞられ、乳頭を爪先でカリッと引っ搔かれる。ユリアは無意識に太腿を擦り合わせていた。

「ん♡ ん♡ あ♡ あ♡」

「乳首が弱いのだな」

「ほう、ごめ、ごめんなさ、んくう♡」

「謝るな。褒めているのだ」

「ふえ……?」

「乳首が弱いのは良き妻の証だ」

「あっ!♡」

ピンっ♡ と弾かれ、またユリアの腰が跳ねる。褒められたユリアは嬉しくてにこにこしてしまった。

しかし。

「ちゅう♡」

「んあっ!♡ え、エリアス様……!? ふあ、やんっ♡」

綺麗なエリアスの顔が乳房に近づき、ペろりと舐められた。そのまま舌でちろちろ♡ と可愛らしく突起を刺激される。

「やあっ♡ エリアスさまっ、それは、それはっ……ああんっ♡」

「ぢゅるっ♡ はあ、ユリア、君の乳首をしやぶるのは夫の勤めな

のだ。止めてはいけない。れるう……♡」

「そんなっ……あんっ♡ あう♡ え、エリアスさま、いいです、こんなこと、しなくてっ……♡ ひゃうん！♡」

「……俺に夫の勤めを放棄しろと？」

「きゃうんっ！♡」

かり♡ と乳首を甘噛みされ、ぴくん♡ と反応したユリアは慌てて首を横に振った。

「そ、そんなこと、あっ……！！♡」

「君に妻の勤めをさせているのだから、俺も夫の勤めを放棄するわけにはいかないのだ。ちゅう♡ ぢゆる、れるう♡」

「あ、やっ♡ んんっ♡んくう！♡」

息が上がり、お腹の奥がきゅーん♡ と切なくなる。ユリアは必

死に声を抑えながら初めてのの快樂に耐え続けた。

しかし。

「……声を抑えるなど言つたはずだが」

「だって、だって、こんな声、エリアス様に嫌われちゃう……！」

「………馬鹿なことを」

「きゃ！」

急にベッドに押し倒され、ユリアは顔色を青くさせた。自分に覆い被さっているエリアスの青い瞳は、静かな炎のように燃えている。

(エリアス様、怒ってる……)

エリアスとの付き合いが浅いユリアは、そう思った。

「え、エリアス様……ごめんなさいっ、私、あの……」

「君は俺の妻だ。俺が妻を嫌うことなどありえない」

「あ……」

まっすぐに見つめられ、ユリアはぽつと顔を赤くさせる。その頬を撫でたエリアスは、優しくユリアの唇を食んだ。

「ん……♡」

ちゅ、ちゅ、と何度も口付けられて、ユリアは目を閉じて受け入れる。すると、ちゅぷちゅぷ♡と口の中をかき混ぜられ、ユリアも同じように自分からもエリアスの舌を追いかけた。

「ふ……ユリア、うまくなつたな」

「ん……♡　ちゅ……♡」

「いい子だ……」

（また、いい子って言うてくれた……嬉しい……）

嬉しさを感じてユリアが微笑むと、エリアスの指先がするりと下

腹部を撫でた。

「あっ」

「ユリア……ここに俺たちの子が宿るのだ」

「あ……」

「わかるだろうか？」

「はい……」

こくりとうなずいたユリアは、すりつと自分の下腹に手を当てた。  
「ここに、エリアス様の、赤ちゃん……」

「……」

「私、がんばりますっ！」

ふんす！ とやる気を出したユリアは拳を握って宣言したが、エ  
リアスはその彼女を無言で見下ろしていた。

「……：……：頑張るのは、俺だ」

「え？　でも……」

「回数は多くなるだろうから、それについてくるという意味では、頑張らなければいけないが」

「回数……？」

「今日は初めてだから一度にしておくが、明日からは……二、いや、三……五……もつといくか……？」

「……：……：？」

考え込むエリアスにユリアが不思議そうな顔をしていると、エリアスは我に帰ってユリアを見下ろした。そして、ベビードールを広げむちっとした太ももを左右に開く。

「きゃあ!？」

「こら。暴れるな。これも妻の勤めだ」

「えっ、で、でも……」

「ああ、君のここは勤めを果たしているな」

「んあっ！♡」

割れ目を長い指でなぞられ、ユリアはびくん！と跳ねる。エリアスの指はぬるりと透明の粘液で濡れていて、ユリアは顔色を悪くさせる。

「え、あ、わ、私っ……！」

「これはなんだかわかっているか？」

「お……おもらし……」

「……」

今にも泣きそうになりながら言うユリアにエリアスが固まったの

が見てとれた。黙っているのではなく固まっているのだ。

「……違う。ほら」

「ふあ、ひゃんっ!?♡」

湿ったままの指で割れ目をまたなぞられ、ユリアは声をあげてしまふ。

「これは、君が妻の勤めを果たすために分泌している液体だ。恥じることではない」

「そ、そうなんですか……?」

「おもらしをここに塗りたくられて君はそのような反応をするのか?」

「し、しないです!」

真っ赤になってユリアは否定したが、しかし、相手がエリアス様

ならしてしまいかもしれないと思って小さくなった。

「これは君が立派な妻の証拠だ」

「あ……！♡」

くりゅ♡ と陰核をこねられ、腰を浮かせて反応したユリアは、そのままこりこりと可愛らしい豆をいじられる。

「ああっ♡ やっ♡ んんっ！♡」

「どうだ、ユリア。さっきと同じ感覚だろうか？」

「ふぁ♡ あ、は、はい……んうっ！♡」

まだ小さいがぷくつと膨れてきたそこをきゅーつとつままれ、ユリアは背中をしならせた。

「それを気持ちいいというのだ」

「はあ、はあ、きもち、いい……？」

そう言われると、それがすっとユリアの心に落ちた。暑い日に冷水に足をつけたのとは違う、時には暴力のように襲ってくる気持ち良さ。

「ユリアのここも、ここも……気持ちよくて硬くなっているのだ」  
「んあっ♡ あっ♡」

優しく乳首と足の間の突起を擦られ、甘い刺激に身を震わせる。

「あ、んっ♡ エリアさま、あ、あの……」

「ん？」

「あの……あの、私……♡」

「なんだ？」

「エリアス様にして頂くの、きもちいい、ですっ……♡」

「………そうか」

覚えたての言葉を一生懸命使うユリアに、エリアスはたっぷりと間を空けてうなづく。

「ここは、クリトリスという」

「ん、ん♡　クリトリス……んっ♡」

「君は乳首も弱いが、クリトリスはいつとう弱いらしい。良いことだ」

「ん♡　んんっ♡」

よしよしとクリトリスを撫でられ、ユリアはシーツを握りしめながら快楽に耐えた。

「では、この中はなんと言う？」

「あっ！♡」

つぷっと人差し指を入れられ、びくん！と大きく反応したユリア

は、はーはーと荒い息をしながらぼんやりとエリアスの青い瞳を見つめる。

「あう、わ、わ、わかりま、せんっ……あ！♡」

「ここは、まんこ、だ」

「まん、こ……♡」

「君はこれをおまんこと呼びなさい」

「おまんこ……」

ユリアはエリアスの喉仏が動くのを見て、喉が渴いているのかと思っただ。

「そうだ。俺以外の前では言っではいけない、夫婦だけの言葉なのだ」

「は、はい……」

神妙にユリアが頷くと、エリ阿斯はまた指を動かした。

「あっ♡」

「君のここは、もうすっかり濡れているな」

「え？ あっ♡ やあ♡」

くちやくちやとわざと音を立ててかき混ぜられ、ユリアは頬を赤くさせる。

「あ、やんっ♡ エリ阿斯、さまっ♡ エリ阿斯、さまあっ♡」

「ん、どうした？」

「ふあ、こ、こわいですっ、なんかきちやうの、おまんこ、しらないのきちやうのっ、やだあ、エリ阿斯さま、エリ阿斯さまあっ♡」

知らない感覚に怯えるユリアの頭を、エリ阿斯の手が優しく撫でる。

「大丈夫だ。それは怖いものではない。だから、そのまま身を任せ  
ていればいい。俺がついているから」

額にちゅ、と唇を落とされ、ユリアは安堵する。エリアスがそう  
言うならそうなんだと思えた。

「あ、あ♡ エリアスさまっ、あ、あ、あ♡♡♡♡♡」

ぐっ♡ と指が奥まで入ってきて、ぎゅっ♡ とエリアスにしが  
みついたユリアは、身体中に広がる快感に呆然としていた。

「はあ、はあ、んう、んう……？♡」

「これが絶頂だ。君が妻として一人前に成長できた証だ」

きつめのエリアスの睨が優しく緩み、口元が笑みの形になる。そ  
の表情の変化に、ユリアはどきりとする。

「え、エリアスさま……わたし、上手にできましたか……？」

「ああ」

「じゃあ、あの、あの、お、おねがいが、あつて……」

「……なんだ？」

「いい子、つて、よしよししてほしい、です……」

言っている途中に、ユリアは子供っぽかったかな、と不安になった。しかし、すぐに大きな手が頭に乗せられた。

「……！」

「ユリア……いい子だ」

「あ……えへ……♡」

頭を撫でていた手がだんだん落ちてきて、ユリアの頬を包む。

「よく頑張ったな」

「はい……♡」

「だが、まだ終わりではないぞ」

「ん……♡」

ちゅつと軽くキスされ、ユリアはぼうつとした。

「もっと妻の勤めを覚えてもらおう」

「はい……私、エリア様の自慢の妻になるために、頑張ります……」

……♡

「……そうか」

健気なことを言う妻の髪を、エリアスは優しく撫でる。

「それならば、そろそろ本番に行こう」

「あ……」

エリアスのずり下げられた下着から出てきたものは、綺麗なエリアスには似合わない雄々しく血管の浮き出たものだった。

「ひっ……!?」

初めて見たそれに、ユリアは悲鳴をあげそうになる。

「どうした？」

「えっと、あの、あの、わ、わたし、見るの、初めてで……男の人のって、みんなこんなに大きいんですか……？」

「どうだろうな。他人のをまじまじと見たことはないから俺にもわからん。だが……これをそうさせたのは、君だ」

「ひゃっ!♡」

謙遜しているがエリアスは立派な巨根だ。

両足を持ち上げられてしまい、ユリアは恥ずかしい格好になる。

その上、エリアスはそれをぴと♡とユリアのお腹にくつつけた。

「これが、ここまで入る」

「え？ え？」

「そして一番奥で、子種を放つ」

「こ、こだね……？ あ……♡」

すり♡ と陰核を擦られ、腰が揺れてしまう。

「妻の一番の仕事は、それだ。俺の子種をまんこで搾り取ることだ」

「きゃうっ！♡」

エリアスの陰茎は思いの外硬く、それでクリトリスを擦られるとさっきのよりも強い刺激が走る。

「あっ♡ あんっ♡ やあっ♡」

「気持ちいいのはわかるが、逃げるんじゃない」

「は、はいっ♡ ごめんなさっ♡」

逃げようとするユリアの足をしっかりと掴み直したエリアスは、

ユリアに挿入する前に大きさを分からせるよう、ゆっくりと素股を始めた。

「あっ♡ あ♡ やあ♡ んっ♡ あ♡ あ♡」

「はあ…ユリア…」

熱っぽいエリアスの声が鼓膜を打ち、ユリアはびくんっ♡ と身体を跳ねさせる。

「あっ♡ あ、ん♡ あ♡ んっ♡」

「ユリアのまんこは大洪水だから、中に入れなくてもすごい音がするぞ…」

ぐちゅっぐちゅっ♡ と卑猥な音が耳を犯していく。

恥ずかしさと気持ちよさで頭がおかしくなりそうで、ユリアは目をぎゅっと閉じた。

「やっ♡ はずかしっ♡ エリアス、さまっ、はずかしい、です、  
んううっ！♡」

「はあ、ユリア……大丈夫だ、ここには君と、君の夫の俺しかいな  
いのだから……くっ……」

まだ素股だが、ユリアのそこはもう充分すぎるくらい濡れていて、  
滑りがよくなっていた。それがエリアスにも分かるのか、興奮して  
いるような吐息が降ってくる。

「あうっ♡」

「ユリア、ユリアのこの小さな穴に、俺のものを入れるのだ……わ  
かるか？」

「んう♡ 入んないっ♡そんなおっきーの、入んないもんっ！♡」  
余裕がなくなったユリアは半泣きでイヤイヤと首を横に振るが、

そのせいで逆にエリアスの下半身が重くなる。

「だめだ、ユリア、妻の勤めを果たさねば……ゆっくり慣らすから」  
「んんん♡」

今度は二本の指が入ってきて、ユリアは足をピンと伸ばす。

「ふ、あ♡ あゝ……♡ ゆびい……だめっ……♡」

「だめじゃない。これで慣らせば、俺のものがちゃんと入るようになるから」

「あ……あ……♡ んう、ほ、ほんと、ですか……？ くうん♡」

「ああ……それでも初めては痛いだろう。俺も君に痛い思いをさせるのは嫌だが……どうか今日だけは耐えてくれ」

「はい……がんばります……♡」

エリアスの優しい言葉にユリアは安堵し、ぎゅっと抱きつく。

「いい子だ……。そのまま、力を抜いていなさい……」

「はい……♡」

ユリアの頭を撫でたエリアスは再びユリアの膣内を指で犯している。

「あ……♡ あ……♡」

「ここが子宮の入り口だ。ここにたっぷり精液をかける……」

「は、はい……♡ んっ♡ あ♡ ああっ!?!♡ そこおっ!♡」

ぐり♡ と中にある一点を押され、ユリアは仰け反った。

「ああっ♡ ああっ♡ やあっ♡ そ、それえっ♡ へんっ♡ な

んかへんですっ♡ ああんっ♡」

「さっきも経験しただろう？ 大丈夫だ。君なら上手にイけるはずだ」

「んっ、んっ♡♡ イ、くっ……？♡♡」

「ああ。さっきイって、気持ちよかっただろう？」

「んっ♡ きもち、よかった、ですっ……♡♡」

「いい子だ。イク時はどこでいきそうなのか、私に言いながらいきなさい。いいね？」

「はいいっ♡♡ あ、あ♡♡ イき、ますっ♡♡ おまんこ、イっちやいますっ！♡♡ ああっ！♡♡ あああっ！！♡♡♡♡」

びくんっ♡♡ びくんっ♡♡ と身体を痙攣させ、ユリアは中で絶頂を迎えた。

「はあ、はあ、んっ……♡♡」

「よし……よくできたな。いい子だ」

「ふふ、えへへ……♡♡」

絶頂して少しだるそうなユリアだが、エリアスに褒められ嬉しくて微笑む。エリアスはそんなユリアをじっと見下ろした。

「では、本番だ」

「え……？ あ……♡」

「少し早いかもしれないが……」

「んあ♡♡ あ、え？♡ え、エリアスさま、さっきより、おつき

……？♡ あ、ああんっ！♡♡」

「くっ……」

ずぷっ……♡

ユリアは少し怯えたが、エリアスはユリアが逃げる隙を与えず、龟头だけを淫口に入れた。

「あ……あ……！♡♡」

「はあ……♡ 君のまんこは小さいから、きついな……すごい締め付けだ……はあ……♡」

まだ先っぽだけしか入っていないのにエリアスは苦しそうだ。美形なので顔に汗を垂らして眉間に皺を寄せるのが非常に色っぽい。

「あ……エリアスさま、ごめんなさ、わたし、おまんこ、ちいさくて……んんっ……♡」

「いいんだ。おっぱいが大きいのおまんこは小さいのは、興奮するから」

「え……？ んっ♡♡ ん♡♡」

壮絶な色気を撒き散らかすエリアスが何を言ったかユリアは理解できなかった。

「君のちいさなまんこが俺のぶつといちんぽを一生懸命啜え込んで

るのもたまらん」

「んん……？ んぁ！♡♡」

やっぱりエリアスが何を言っているかユリアにはわからない。わからない方がいいことも世の中にはある。

「ほら、奥まで入るぞ……♡」

「あっ！♡ やあっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡」

ずぶっ♡ ぐちゅっ♡ ねちねちっ……♡

音を立てて、陰茎がどんどん中に入ってくる。

せっかくの美形を台無しにするほど血走らせた目を見開いたエリアスはその結合部を凝視していたが、幸か不幸か、ユリアは目をぎゅっと閉じて挿入の衝撃に耐えていた。

「はあ……♡ はいった……♡ わかるか？ ユリア……」

「あう……♡ あ……♡ あ……♡」

「ゆっくり息をするんだ」

「は、はいい……♡ ん……♡ ふうーっ……♡ ふうーっ……♡」

「いい子だ……。ほら、見てごらん。俺たちが夫婦になった証だ……」

落ち着いてきたユリアは、視線を下げてソコを見た。自分のおまんこがぽっくり広がって、エリアスの顔に似合わないぶっとくてガチガチのものが入っている。そこは少し赤い液体がついていて、それが自分の血だとわかった瞬間、ゾクツとした快感が背筋を駆け上った。

「あ……♡ あ……♡ うそお……♡ ほんとに、入ってる……♡  
ああ……♡」

「ああ……これで君は、名実ともに私の妻だ……」

「ああ……♡ はい……♡」

痛みや苦しきはあるが、それ以上に嬉しくて、ユリアはにこにこしてしまふ。しかしエリアスの男根が赤く汚れているのを見て、少ししゅんとする。

「あ、でも……エリアス様の、私の血で汚れちゃった……ごめんなさい……」

「……謝ることはない。これは君が俺に純潔を捧げた証だ。俺は………嬉しい」

自分の気持ちを言うことのないエリアスにしては珍しい言葉だった。ユリアはそれが嬉しくて、おまんこをきゅー♡ と締めてしまふ。

「くっ……♡ ユリア、それはわざとか……？」

「えっ？ んぁ♡ な、なにがですか……？ あっ！♡」

「……君に教えなくてはいけないことはまだまだありそうだな」

「え？ え？ あ！♡ あ！♡ あ！♡ あ！♡ あ！♡ あ！♡」

ぱんっ！♡ ぱんっ！♡ ぱんっ！♡ ぱんっ！♡ ぱんっ！♡

ぱんっ！♡

肌が激しくぶつかり合う音が響く。処女だったユリアにはいきなり激しい行為だが、ここまで我慢に我慢を重ねたエリアスは限界だった。ここまで我慢したので褒めて欲しいくらいだった。

「はあっ……♡ はあっ……♡ ユリアっ……♡ これが、夫婦の営みだっ……♡」

「んあっ♡♡ ふあいつ♡♡ ふ、ふうふの、んあっ！♡♡ ひあん

♡  
」

「ああ……♡ これから毎日するんだ……♡ 今日からずっと、毎晩……♡」

「ひうっ！♡ ま、まいにちっ？♡♡」

「ああ、そうだ、世の中の夫婦は皆毎晩、いや、毎朝毎晩でも、とにかくたくさんやっている……！」

「ふああ！♡♡」

平気でウソをつきながら、エリアスは腰の動きは激しくさせる。それでもやはり苦しそうな顔が美しく、ユリアはドキドキする。美形はとても得だった。

「夫婦仲が悪いと周りに気づかれると、貴族は色々と面倒なのだっ。だから、毎朝毎晩愛し合って仲良くしているように見せる必要がある。

るっ」

「んんっ♡　んあっ♡　ああん♡　んんっ！♡♡」

「ユリア、いいなっ？毎日だぞっ？　妻としての勤めだから、ちゃんとこなすのだぞっ？♡」

「んっ♡　んっ♡　んっ♡　んっ♡　んっ♡　んっ♡」

「ユリアっ？♡　どうする、毎日するかっ？♡」

「は、はひっ♡　しま、すっ♡♡　エリアさまとっ、まいにち、んっ♡　んんっ♡　んっ♡　んんんんんっ！♡♡♡♡♡」

言い終わる前に、ユリアは耐えきれずに絶頂してしまった。足先までぴーんと伸ばし、身体が痙攣したあと、ぐったりとベッドに沈み込む。

「はあ、はあ、はあ………♡」

「…………ユリア。イク時は俺に言いなさいと言ったはずだ。どうして勝手にイったのだ」

「あっ…………ごめんなさい…………」

「悪い子だ。お仕置きだな」

「ふぁ！♡」

エリアスに叱られしょんぼりするユリアだったが、からだをぐるんと反転させられ、ベッドに四つん這いにさせられる。

「え、エリアスさま…………？ あ の、この格好って…………」

「おしおきだと言っただろう？ 尻を高く上げて…………ほら、こんな風に…………くっ♡♡」

「あああっ！♡♡♡」

ぐぢゅんっ！♡ とイったばかりの膣にガチガチの陰茎が奥まで

一気に挿入され、ユリアは悲鳴じみた声を上げた。

「あ……♡ あんっ！♡ あ、また奥までっ……♡」

「ほら、もっとまんこを締めなさい。まんこを反省させて、俺のちんぽに謝るのだ。そして二度と勝手なことはしないと誓って」

「はいいっ♡ ごめんなさ、いいっ♡ 勝手にい、いつて、んあ！

♡ ごめ、なしゃ！♡ ああっ！♡♡♡」

「はあ、許す♡」

四つん這いにさせているため妻の顔は見えていないが、エリアス  
はつい速攻で許してしまった。許すもクソもない言いがかりだけど。

「はあ……♡ ユリア、君が悪いことをしたら、こうして獣のよう  
な交尾をしよう。わかったな？」

「んあっ、あっ！♡ は、はいい……♡ わかりましたあ……♡」

「よし。いい子だ」

「ひんっ！♡」

ユリアの尻を掴んでがつつ腰を振っていたエリアスは、上体を倒してユリアの胸を揉み始めた。

「あっ！♡ あうっ！♡ おっぱいだめえ……！♡」

「ダメじゃないだろう？ 君は乳首ですぐ気持ちよくなるのだから。それに、君が気持ちよくなればまんこがよく締まる。夫婦円満のためには必要なことだ」

「んん……！♡♡ ご、ごめんなさ、ほんとは、だめじゃ、ないれす♡♡ きもち、よくてっ……♡♡ きもちよすぎて、おかしくなりそうでっ♡♡♡」

「……そうか。わかった。これからは君がだめだと言ったら、その

意味であることを覚えておこう」

「ふぁあん！♡♡」

乳首をくりゅん♡ と摘まれ、後ろに密着されて腰を振りたくられ、ユリアは身体中を真っ赤にさせて喘ぐ。あの冷徹で美貌の宰相が若い妻に本当の意味で猿のように犯しまくっているという、とてもまずい光景である。

「あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡」

「んううっ♡そこでしゃべっちゃ、だめえ！♡♡」

「そうか、ダメか……♡ ユリア、ユリアっ……♡♡」

「あ、やあ、やあっ！♡♡」

耳まで弱いユリアは、エリアスに耳元で熱っぽく名前を呼ばれ、

それだけで余計に膣内がきつくななる。そのせいでエリアスはさらに興奮して激しく腰を振った。

ばちゅんっ、ばちゅんっ、ばちゅんっ、ばちゅんっ、ばちゅんっ、ばちゅんっ！♡♡

「はあっ…♡ ユリアっ…♡ そろそろ出すぞ…！！」

「んあっ!?♡♡ あ、あ、あ、エリアス、さまっ、わたしも、わたしも、イきますっ、あ、あ！♡♡」

「今度はちゃんと言えたな、えらいぞ、はあっ、くう、ユリア、孕めっ…！！♡♡♡」

「ふああああ！♡♡♡♡♡」

どぴゅっ♡ びゅ————っ！♡♡ びゅくっ、びゅくうっ！♡



まさかこの冷徹な男が、というほどの量の精液を吐き出し、エリアスは器用に挿入したまま、ユリアの身体を仰向けに倒した。

ユリアは目も口も半開きで汗か涙か唾液かわからない液体で顔をぐちゃぐちゃにしていたが、エリアスは愛おしそうにユリアの頬を撫でた。

「はあ、はあ、はあ……♡」

「ユリア……大丈夫か？」

「ん、は、はい……♡」

「いい子だ」

「んっ……♡」

ちゅ、と唇を重ねるだけのキスをしながら、最後まで吐き出すようにエリアスはゆっくりと腰を揺らした。するとまたユリアが甘い

声を出してしまい、エリアスのものは芯を取り戻し初めてしまう。

「ん……♡ えりあすさま、んん……♡」

「……………」

ユリアが舌を出してキスをせがむと、エリアスは固まった後、それに応えて舌を絡ませる。

「ぢゅ、くちゅ、れろ……♡」

「れるう、んむう、はあ、んっ……♡」

キスをせがんで一生懸命舌を伸ばしてくるユリアにエリアスはたまらなくなり、どぴゅっ♡とまた精を放ってしまった。エリアスはまた固まって、それからようやくちんぽを引き抜く。

「ああんっ♡」

ぬぽんっ♡ と抜かれると、栓を失ったそこから白濁が溢れ出し

た。

「あ……♡ あ……♡ あ……♡」

「……………」

もう一度ハメたくなってしまったが、ユリアはこれが初めてだ。これ以上したら体に悪い。エリアスは理性を総動員して堪え、ユリアの隣に寝転んだ。

「ユリア……」

「ん……」

名前を呼ぶと、甘えるように抱きついてくる。エリアスがユリアを抱きしめ返すと、ユリアは眠ってしまったようで、規則正しい呼吸が聞こえてきた。

エリアスは眠っているユリアの額に軽くキスをして、自分も目を

閉じた。

続  
く

## 冷徹宰相の無知妻教育\_体験版

2023年4月25日発行

---

♡ どん丸／がら堂

♡ Twitter : @garadou18,@donmaru18

レビュー・感想、励みになります。

良かったらよろしく願いいたします。